

独立医薬品情報誌の役割

新しい機序の薬剤の開発ラッシュが続いている。人々の健康に利するなら、これほどよいことはない。しかし、1990年以降導入された薬剤で、人々の寿命を延ばし、生の質（QOL）を高める画期的なものは極めてまれである。ところが、現在の医薬品売上高上位のほとんどが最近20年間で開発されたものになってきている。

メーカーは、自社製品を良いように見せる操作をしている。データ捏造のディオバン事件は氷山の一角である。タミフルやイレッサ、HPVワクチン、アクトスなどによる薬害では、メーカーは無理なデータ解釈をして有効・安全と見せかけている。この手法は21世紀に入って特に著しく、今回取り上げたSGLT-2阻害剤もその典型の一つである。企業は資金力にものをいわせ、研究者（医学会）と規制当局、あるいは世界保健機関（WHO）などの公的機関、メディア、専門分野の出版業界をも取り込んで、データ操作と宣伝を広げている。

企業の影響を受けた情報が世に広まっている中で、専門家向け情報誌「The Informed Prescriber」（通称：TIP誌、1986年創刊）と一般向け情報誌「薬のチェックは命のチェック」（通称：薬のチェック、2001年創刊）の存在は重要である。広告はもちろん、企業からの人的・資金的な援助を一切受けないからこそ、他のメディアにはできない、真の意味で、市民・患者の立場に立った、科学的根拠に基づいた適切な分析をした情報の提供ができるからである。

本誌は、これら二つの独立医薬情報誌を前身として、本年2015年1月、新たな装いで、主に専門家向けの医薬品情報誌としての一步を踏み出した。一般の方、マスメディアの方にも読んでいただけるように、分かりやすい表現を心掛けるようにしたい。

毎号、新製品を批判的吟味して、本誌の評価を載せるが（New Products）、その中で、診療に必須の薬剤も積極的に取り上げるつもりである。本号のメトロニダゾールがその例である。

他では知ることのできない情報が、本誌から得られるはずである。30年間にわたり、具体的に薬剤名を挙げた厳しい批判が、企業からの訴訟も受けずにできてきたのは、動物実験に始まって臨床試験、疫学調査まで、徹底的に調べ尽くして記事にしているからである。タミフルのkokran共同計画の分析で明らかとなったように、出版されない情報が公開されれば、製品に不都合な事実が明るみに出る。

市民の健康を守るために、kokran共同計画も主張するように、国は薬剤承認の根拠とした膨大な情報を開示しなければならない。

そうして得た情報を元にして、企業の影響を一切受けない真実の情報、診療に役立つ情報の提供を心掛けていくつもりである。

一人でも多くの方に読んでいただくことが、本誌を充実させることに不可欠です。ぜひ本誌の存在を他へも広げていただき、良い情報づくりを応援していただきたいと思います。